

# 『嵐が丘』におけるキャサリン・アーンショウの生涯

堀 出 稔

## The Life of Catherine Earnshaw in *Wuthering Heights*

Minoru HORIDE

ヴィクトリア朝というイギリスが多いに繁栄した時代において、文学界ではともすれば、その時代の道徳を守ることを基盤にした作品が注目されがちであった。教養のある人々は彼らの一つの習慣として、小説や詩を読んだり書いたりするまでになっていた。そのような状況の中で、ヨークシャのホワースという全く文明に取り残された一地方において、ブロンテ姉妹というきわめてヴィクトリア文学においてめずらしい異色の作品を世に出した女性達がいた。その姉妹のうちでも特にエミリー・ブロンテが『嵐が丘』を出版した時、当時の人々に衝激的な印象を与え、その批評は驚異と反発がほとんどであった。しかしその苦悩と歓喜に満ちた小説を書いたエミリーの日常生活とその一生は、外面的には波乱に満ちたものとは言えなかった。彼女の姉シャーロット・ブロンテが指摘しているように、誰よりもヒースの咲く荒野を愛し、牧師館においていつも家事の担い手となることを自分の喜びとしていたようである。彼女はホワースという寒村において世間にそれほど出ることもなく、三十一年間という短い生涯を終えた。そのような生涯であったにもかかわらず、彼女はなぜあのように激しい気質を備えたキャサリン・アーンショウとヒースクリフという人物像を創造することができたのであろうか。この小論においては特にキャサリンに焦点を合わせ、彼女の生涯と死の意味を分析する。その順序は、第一課題として『嵐が丘』におけるキャサリンの生涯を作品に沿って分析する。第二課題としてイギリス文学の他の作品及び外国文学を参考にし、キャサリンという女主人公のような人物が他の作品において見い出せるであろうかと考える。もし見い出せるとすれば、その共通点と相違点は何かを考えてみたい。第三課題として『嵐が丘』の作者エミリー自身の伝記的事実を分析する。そして第一、第二、第三課題を総合して、彼女がキャサリン・アーンショウを通して一体何を訴えようとしたかを考察してみたい。

第一課題として『嵐が丘』におけるキャサリン・アーンショウの生涯を追っていくと、九章に次のような言葉がある。

I was only going to say that heaven did not seem to be my home; and the angels were so angry that they flung me out, into the middle of the heath on the top of Wuthering Heights; where I work sobbing for joy!<sup>1)</sup>

これはキャサリンが見た夢を召使いのネリーに話す言葉である。彼女にとって天国に住むことは、くつろいだ気持にはなれずつらいと感じるのである。天使は怒って、地上に帰りたいたと泣く彼女を嵐が丘に投げ出してしまふ。そこに戻されたキャサリンは、嬉しさのあまり涙を流す。このような言葉から判断すると、彼女はキリスト教会が示す天国というものに関心を示さない人間のようなのである。それよりむしろ愛するヒースクリフとこの地上、特に嵐が丘に住むことを最上の喜びと考えているようである。しかしキャサリンの悲劇は、ヒースクリフが偶然にも

彼女の言葉を中途までしか聞かなかったところにある。

Ere this speech ended, I became sensible of Heathcliff's presence. Having noticed a slight movement, I turned my head, and saw him rise from the bench, and steal out, noiselessly. He had listened till he heard Catherine say it would degrade her to marry him, and then he stayed to hear no farther.<sup>2)</sup>

ヒースクリフにとってこれほどつらい言葉はなく、彼はその後嵐が丘を去っていく、しかし彼女がその後に話す核心に触れた言葉は、彼に対する愛に満ちあふれていたのである。もし彼がそれらの言葉を聞いていたならば、嵐が丘を去るということはなかったであろう。

Nelly, I see now, you think me a selfish wretch, but, did it never strike you that if Heathcliff and I married, we should be beggars? whereas, if I marry Linton, I can aid Heathcliff to rise, and place him out of my brother's power.<sup>3)</sup>

キャサリンはヒースクリフと結婚することは、“beggars”という言葉が象徴するように金銭的に生活ができなくなると考える。それに対してエドガー・リントンと結婚すると豊かな生活を確保される。その上ヒンドレー・アーンショウからヒースクリフを独立させ、一人立ちの出来る人間になるよう援助できると言うのである。さらに彼女は彼とリントンに対する愛の相違を述べる。

My love for Linton is like the foliage in the woods. Time will change it, I'm well aware, as winter changes the trees. My love for Heathcliff resembles the eternal rocks beneath—a source of little visible delight, but necessary. Nelly, I am Heathcliff.<sup>4)</sup>

リントンの彼女の愛は、“Time will change it.”であり、ヒースクリフへの彼女の愛は、“necessary”であると言う。そして最後に彼女は、“I am Heathcliff”という理解しがたい言葉を口走る。マーク・キンケッドウィークスはこの言葉を次のように分析している。

The self is not contained in an “I”; has no sustaining “existence” or “being” in itself. She can only fully exist, be herself, in existing and being beyond herself in Heathcliff; as he can only fully exist, be, live in her.<sup>5)</sup>

“I”は現実のキャサリン自身を示しているのではなく、彼女の生と死を越えた存在だと言う。さらに恋人同志の彼女とヒースクリフの現実を超越した存在として、二人のどちらにも生き続けるというのである。彼女とヒースクリフの愛を考える場合、エミリー・ブロンテの姉シャーロットの『ジェイン・エア』における愛を想起しなければならない。リチャード・チェイズはジェインの愛について次のように述べている。

Or she feels a “perfect energy” within her and when this energy burns in harmony with her lover's soul, she achieves “Identity” in a newly meaningful universe which was once “dumb/Stone-deaf, and blank, and wholly blind,” “dark-image-less-a living tomb.”<sup>6)</sup>

ジェインはセントリヴァーズの求愛を断り、ロチェスタのもとに走る。精神的遍歴の末、彼女に秘められた力が、盲目となった恋人ロチェスタの魂と調和する時、確かに燃焼するのである。そして今まで暗く思われた世界は新しく意味深いものとなり、そこには彼女自身が必要だと感じるのである。その瞬間から彼に対する愛は献心的なものとなっていく。このような愛の在り方から判断して、もしキャサリン・アーンショウがヒースクリフに恋焦れるままに彼と結婚するとするならば、それは厳しい階級制度の中の因襲に対する背反行為となってしまう。なぜ

ならヒースクリフはヒンドレーによって召使いの立場にいなけりなかつたからである。一応エドガ・リントンの妻になつたキャサリンは、心の中で常にヒースクリフを思つてゐるのである。リントンとの結婚によつてキャサリンは、外的情況（社会的因襲）への調和と心の中での社会道徳への背反という状態に悩むのである。夫エドガはキャサリンの苦しみを理解できず、“among books”という表現に見られるような生活に没入して行く。召使いのネリーは世間の常識と道徳をキャサリンに話すだけで、複雑に揺れ動く彼女の心を理解できないのである。キャサリンはしだいに孤立し、ついには精神錯乱状態に陥るのである。彼女の心はまるで閉された牢獄の中に入れられたと感じ、夢に描く理想の姿は決して実現されることなく、ただ幻影の中にのみ存在することを知るのである。キャサリンの心が牢獄から抜け出すためには、この世のすべてのことを忘れ去り、ただ心を幻影に向つて飛翔させることなのであろう。

“..... That is not my Heathcliff. I shall love mine yet; and take him with me— he’s in my soul. And,” added she, musingly, “the thing that irks me most is this shattered prison, after all...”<sup>7)</sup>

現実には病いに臥してゐるキャサリンを見舞ひに来たヒースクリフに対して、彼女は彼に“my Heathcliff”でないと云う。すでに彼女の心はこの世を離れ、至純の歡喜の世界へ飛び立とうとじてゐる。だがそれは彼女にとって死を通してしか実現できないことであつた、死後キャサリンは、ヒースクリフがアーンショウ家とリントン家に対する復讐を終えるまで待ち続けるのである。

第二課題としてイギリス文学及び外国文学の他の作品と対照させて、『嵐が丘』のキャサリン・アーンショウの生涯を考えてみる。最初にドイツの詩人 R. M. リルケの『ドイノの哀歌』を対照させてみる。この作品はリルケの思想の断片を暗示してゐると言われる。それは恋愛についてである。彼が暗示した恋愛の段階を分析してみると、愛の選択と決定—愛の燃焼—愛の自由というように受けとれる。愛の選択においては、恋人同志がお互いに選びとる決意を示し、お互に他者の中に自分を見い出す。他者に自分自身を投影することによつて愛を見つけようとする。愛の燃焼においては、愛による現在への集中、寄り添うことによつて親密になり、お互いに共感する。そこには第三者の嫉妬感が伴う場合がある。最後の段階の愛の自由においては、恋人同志が現実に帰り、お互いを束縛することなく自由に解放する。すなわち愛を不遍化することによつて、永遠の愛を見い出そうとする。このような例からキャサリンの愛について考えてみると、ヒースクリフとの出会いは愛の選択であり、彼女の自己決定がそこでなされる。リントン夫人となつたキャサリンがヒースクリフと出会つてからは彼女にとって愛の燃焼であり、そこにはエドガの嫉妬感が伴う。しかしキャサリンⅡ世の誕生と同じくキャサリンの死は、愛の不遍化を暗示してゐるよつに思える。しかしエミリー・ブロンテの描く愛とリルケの描いた愛は、不遍化という問題で少し異つてゐるよつである。リルケは、愛する者同志がお互いを自由に解放することによつて愛を人間世界を越えた何かに結びつけようとしてゐるよつである。これに対してエミリーの描いたキャサリンの場合は、地上においても愛の成就を願ひ、靈魂となつても二人でいたいと願うその激しさと人間の息吹きである。次に最も類似する作品としては、恋愛物語の古典とされる『トリスタンとイゾート』であらう。そこに描かれるのは愛の情熱の激しい喜悅と無限の苦痛である。死後でさえ二人の墓に生えたハンバミの木にスイカツラの蔭がからまり、切つても切つてもまたからまる様子は、まさにキャサリンとヒースクリフの愛の在り方と共通するよつである。また近代においては『ボヴァリー夫人』が掲げられる。この世の道徳に背反しながら恋をし、凄絶な死を遂げる彼女の情熱が小説に満ちあふれてゐる。

また現代にあってはグレアム・グリーンの *The End of the Affairs* にはサラァ・スマイルとモーリス・ベンドリックスの愛が描かれている。その中でも『嵐が丘』に見られるような愛の在り方が読みとられるのである。

さて第三の課題、作者エミリー・ブロンテの伝記的事実から見て、『嵐が丘』のキャサリン・アーンショウがいかにして創造されるに至ったか考えてみる。『嵐が丘』が世に出たのは、1847年12月、彼女の晩年であった。翌年の12月にはわずか31歳の生涯を閉じるのである。その短い一生においてほとんどホワースから出なかったエミリーは、その地域を含むヨークシャー体に広がる荒野を愛した。

**My sister Emily loved the moors. Flowers brighter than the rose bloomed in the blackest of the heath for her; out of a sullen hollow in a livid hillside her mind could make an Eden. She found in the bleak solitude many and dear delights; and not the least and best loved was—liberty. Liberty was the breath of Emily's nostrils; without it she perished.<sup>8)</sup>**

彼女は世間に出るよりも、あてどなく荒野をさまよい黙想することに喜びを感じ、その自由を大切にした。このような環境の中で牧師の娘として教育を受け、育てられてきたのであった。幼い頃母を失い、姉シャーロットや兄ブランウェルや妹アンと共にしばしば空想物語を創作して過した。シャーロットとブランウェルが『アングリヤ物語』、エミリーとアンが『ゴンドル物語』を作り、空想物語に対する関心は青年期にまで及んだと言われる。『ゴンドル物語』に登場する **Augusta Geraldine Almeda (A.G.A.)** という女主人公とその悲劇は、ロマンティックな叙事詩のように描かれている。この女主人公は『嵐が丘』のキャサリン・アーンショウの人物像に強い影響を与えているようである。母を失った後ブロンテ家の子供達は、マライア・ブランウェルという祖母に育てられた。彼女は熱烈なメソディストで、子供達に対する宗教についての教育は特に厳しかった。エミリーの宗教に対する考え方について次のような逸話が残っている。

**One time I mentioned that some one had asked me what religion I was of (with the view of getting me for a partisan), and that I had said that that was between God and me. Emily (who was lying on the hearth-rug) exclaimed, "That's right."<sup>9)</sup>**

“I”はシャーロットであるのだが、ある人からどのような信仰心を持っているかたずねられた時、それは神と自分との問題ですと答えた。それを聞いていたエミリーは、まさに“**That's right**”と叫んだと言うのである。この逸話からも理解されるように、彼女にとっては神に対して自分自身が向うということであり、既成の宗教を信じる信じないということには言及していない。このような思考は、晩年に書かれた詩においても見い出される。

Jan. 2, 1846

**O God within my breast  
Almighty ever-present Deity  
Life, that in me hast rest  
As I Undying Life, have power in Thee<sup>10)</sup>**

エミリーがこの世を去る2年前の詩である。“**God within my breast**”という言葉によって表現されているように、彼女にとってはこの世の諸相などに心を煩うことがないようである。何か全能の神の必然性に身を委ねて、そこに安堵感を見い出しているように見える。事実彼女は死に至る直前まで医者に見てもらうことを拒み、薬も飲まないような状態で死んでいったので

ある。まるで肉体から魂を脱却させ、永遠の世界に向かうかのようであった。

第一課題においては、キャサリンのヒースクリフへの愛とその挫折による苦しみが描かれた。その苦悩を越えようとする彼女が夢見たものは、生も死もかかわりなく必然としてのヒースクリフへの愛である。第二課題においては、不遍に達しようとする彼女のヒースクリフへの愛は、愛し合う二人の世界以外の永遠の何かを思考するのではなく、ただ彼ら自身の世界を求めようとする激しい情熱の息吹が感じられた。第三課題においては、エミリーの晩年に近い頃書かれた詩によって彼女が心の内なる神を自覚し、泰然としてやすらぎを見い出している姿が伺える。エミリー・ブロンテは『嵐が丘』のキャサリン・アーンショウを描きながら、死の予感を恐れることなく、生命の燃え尽きる時まで泰然自若として待つことの意味を悟っていったのではなかろうか。

### Texts

- 1) Brontë, Emily: *Wuthering Heights*, W.W. Norton & Company, Inc. (1963)
- 2) Brontë, Emily: *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*, Columbia Univ. Press (1941)

### Reference Books

- 1) Gaskell, E.C.: *The Life of Charlotte Brontë*, Smith, Elder & Co. (1900)
- 2) Gregor, Ian: *The Brontë*, Prentice-Hall, Inc. (1970)
- 3) Lettis and Morris: *A Wuthering Heights Handbook*, The Odyssey Press. Inc. (1961)
- 4) Allott, Mariam: *Emily Brontë: Wuthering Heights*, Macmillan (1970)

### Notes

- 1) *Wuthering Heights*, 72
- 2) *Ibid.*, 73
- 3) *Ibid.*, 73
- 4) *Ibid.*, 74
- 5) *The Brontë*, 88
- 6) *Ibid.*, 21
- 7) *Wuthering Heights*, 134
- 8) *The Life of Charlotte Brontë*, 138
- 9) *Ibid.*, 142
- 10) *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*, 243